

第 I 部  
乱步低迷



# 1

## 深夜の瞑想

日本の近代的な推理小説の礎を据えた江戸川乱歩は、生涯に約百三十篇の作品、十数冊の随筆、回想をのこしたが、多くの作家同様、海外の作家から大きな影響を被っている。

では、乱歩はどのような作家を最高の存在と考えていたのだろうか。私は、彼自身による次の感想が、一つの明快な回答になっていると思う。

「深夜、純粹な気持になって、探偵小説史上最も優れた作家は誰かと考えて見ると、私にはポーとチェスタートンの姿が浮かんでくる。この二人の作品が、あらゆる作家と作品を超えて、最高のものと感じられるのである。この二人のほかの作家はいずれも、どこかに不満がある。突飛なことを書いても根底が平俗であるか、気取っていても薄っぺらであるか、滋味はあっても廉っばいか、文学的に優れていても探偵小説味が稀薄であるか、なにかしら満足しないものがある」(光文社版『江戸川乱歩全集』第三十卷)

私にとって、乱歩のこの文章はきわめて印象的なものだった。高校三年の一九五三年（昭和二十八）夏、「別冊宝石」中の『世界探偵小説全集』（ピースタートン編）に付された解題として一読したもので、乱歩自らもよほど気に入ったらしく、後に同じフレーズを何度も繰り返し返して

いる（翌年の「ハヤカワ・ポケットミステリ」版「不睡日の男」と、四）  
（年後の「海外探偵小説作家と作品」のチェスタートンの項など）

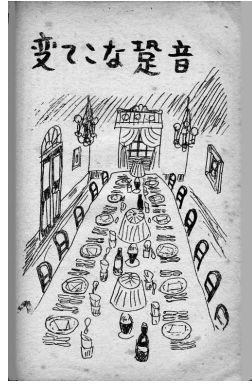
なぜ、そのような強い印象を受けたのだろうか。六十年近い昔のことだが、私の脳裏に浮かんだのは、深夜の書斎で一閑張りの机に向かい、じっと瞑想にふけている作家の姿だったのである。雑誌の口絵などで見ていた「執筆中の乱歩先生」であったかもしれないが、何よりも「深夜、純粹な気持になって」という表現に親しみと共感を覚えたことを忘れない。

一つのこと深く思いをめぐらすために、「深夜」という時刻を選んで「純粹な気持」になるような感性は、すでに失われて久しい。考えてみれば、それは『徒然草』の「ひとり灯の下に文をひろげて、見ぬ世の人を友とする、こよなう慰むわざなり」<sup>（第三段）</sup>に通じる、教養主義型の読書人体験であったはずだ。無論、乱歩もその一人で、爆音や砲声の支配する戦時こそ中斷を余儀なくされたものの、戦後も八年目となり、ようやく電力事情も好転し、夜間の読書や執筆にも余裕が出てきた時点で、自ずからの表現として「深夜、純粹な気持になって」が復活したと思いたい。

もう一つ、あとから知ったことだが、海外の探偵小説の本格的紹介がはじまったころ、一九二四年（大正十三年）に佐藤春夫が、論理的な推理と合理的な解決を持つ作品を「純粹な探偵小説」と呼び、同時代の作家甲賀三郎も「純粹探偵小説」という表現を用いたことがある。いまから思えば、戦後世代としての私が貧しい読書体験ながらこの「純粹」という語に魅力を感じたのは、その時点における（夾雑物のない）探偵小説のエッセンスをイメージしたからであろう。

いずれにしても、乱歩は深夜の瞑想の中で「探偵小説史上最も優れた作家は誰か」という問いを発する。ただちに答が出てくる。「ポーとチェスタートン」である、と。前者は明治期から紹介され、昭和戦前にかけては全集や叢書の形でも頻繁に翻訳が出ていたが、後者は大正後期以後の雑誌「新青年」「ぶろふいる」や昭和初期の円本全集などに代表作が収録されていたにしても、私の年齢では辛うじてその中の二、三に目を通してにすぎなかった。乱歩説の当否はただちに判断できず、「宝石」の同じ号に収録されていた『変てこな足音』<sup>（現行の邦題は「奇妙な足音」）</sup>ほか十篇を卒読し、ようやく「なるほど」と合点させられるという頼りなさであった。

乱歩は別の短編ベストテン選出のさい、ポーの代表作としては『モルグ街の殺人』と『盗まれた手紙』を、チェスタートンについてはブラウン神父ものの二作『見えない人』『奇妙な足音』とをあげている。これらは古典的名作として、紹介は不要と思われるが、念のためチェスタートンの作品について記しておきたい。



松野一夫挿絵『変てこな足音』（「別冊宝石」1953.9）

『奇妙な足音』は、ロンドン屈指の高級住宅街ベルグラビアにあるホテルを舞台としている。上流階級の事大主義的、排他的な趣味を満足させるような高級ホテルで、庶民派のブラウン神父には無縁のはずだが、あるとき卒中で斃れた一人の給仕の懺悔（告解）を聴取するために呼ばれ、書類を

作成しようとクロークの脇にある小部屋を借りることになる。

当日は少人数による名士の晩餐会が催されているほか、館内は至って静かだったので、ペンを走らせていた神父は、ふと廊下の奇妙な足音に気づく。その廊下は給仕のたまり場にも通じているのだが、一人の人間が小刻みに、せかせか歩いてきては、一定の地点まで来るとゆっくりとした歩調になる。これを繰り返しながら、廊下を何度も往復しているのである。いったい、歩くために走る、あるいは走るために歩くということがあり得るだろうか。

暮れなずむ室内で、足音に神経を集中させていた神父は、そのうちに早足が駆け足となり、本人がクロークに駆け込んだのを知った。神父がペンをほうり出して応対に出ると、夜会服を着た紳士から「帽子と外套を頼む」と合札を渡される。探し出して渡すと「銀貨の持ち合わせがないので、これを取ってくれ」と、ソブリン金貨を投げられた。神父は丁重にいった。「失礼ですが、ポケットに銀貨がおありのようですね」

一方、晩餐会は魚料理が済み、給仕たちが食器を下げようとしていたが、テーブルの上にあるべき銀の皿やナイフがすべて消えているのを見て、大騒ぎとなった。客も捜索に加わることが、そのうちにクロークの傍らにいた神父から声をかけられる。「みなさんのお探しのものは、ここにありますよ」。奥から持ってきたのは、両手に一杯の、ピカピカ光る銀器だった。

犯人は神父が一度接触したところのある銀器狙いのフランボーという盗賊だった。彼は紳士の夜会服と給仕の制服が同一ということに目をつけ、たまたま給仕の一人が卒中で斃れたのを好機として、晩餐会では代役の給仕に化け、食器を下げるや給仕に似せた急ぎ足で部

屋を出ると、給仕の溜まりに近い廊下では紳士風の横柄な歩き方に一変し、適当な場所に少しずつ運んだ食器を隠していたのだった。

神父から種明かしを聞かされた晩餐会の客は「紳士が給仕に見えることも、給仕が紳士に見えることも絶対にある得ない」というが、神父は「紳士になるのは楽ではないが、給仕になるのも、また同じくらい骨が折れるものではないでしょうか」という逆説で応じながら、その場を立ち去る。

要約では意を尽くせないが、乱歩はこの作品を「軽妙な味で、スッキリしていて隙がなく、完璧という意味で最上と思う」（『統幻』影盛）と絶賛している。アイディアに富裕な紳士階級への風刺が内包されている点でも、味わい深いものとなっており、「突飛なことを書いても根底は平俗でない」という好例である。

もう一つの『見えない人』については、犯人の隠し方に特色があるため詳述は避けるが、乱歩は「トリックの独創性と強さでは、この方が遙かに上」としている。いかにトリックや謎解きを重視する作家であったかがうかがえよう。

余談だが、『見えない人』はこの「寶石」別冊には含まれていない。元のテキストは一九二九年（昭和四）から翌年にかけて刊行された『世界探偵小説全集』（博文）の第十七巻『チェスタートン篇』（『謎野』府訳）からそのまま再録したもののだが、どうしたわけか十二作品のうち『見えない人』だけが漏れているのである。おそらく紙数の都合からであろうが、乱歩本人も削除について知らされず、十二篇という前提で解説文を記したため、強い不満を抱き、日ごろ